



信じられないほどのカタストロフィーに満ちた彼のアトリエ。その中に無造作に置かれたパレットが、ひときわ目立つ存在だった。売れっ子になり、パリと往復する必要から近々パリへの引越を考えているというので、このアトリエを見るのは最後かもしれない。

アントン・モルナー（一九五七年、ハンガリー、ブダペスト生まれ）は取材に訪れたわれわれを、まるで旧友と再会した時のように、手厚く歓迎してくれた。次から次へと話題の尽きない楽しい会話、大きな身ぶり、何かをたくらんでいるかのようなそぶり、そして無邪気な笑い声。そのハイテンションに圧倒されていると、同行したカメラマンのセッティングが終わらないうちから、アントンのほうが愛用のカメラを持ち出して、われわれを撮り出すしまつ。その間も、立ち位置やポーズにさまざまな注文が飛ぶ……。

そして、彼の妻のクリステイーナもアントンに負けない情熱をもって、盛りだくさんの郷土料理でもてなしてくれた。なかでも「グラシシュ」という具だくさんの赤いポターージュのようなひと皿は、牛肉を二、三日かけて、たっぷりの野菜とともに煮込んだもので、パプリカの鮮やかな色と香りが食欲をそそる。ハンガリーの代表的な母の味だそうで、彼らはこの料理を食べるたび、郷里を強烈に思うのだという。その思いは、彼らがハンガリーを出たいきさつを聞くにつれ、われわれの胸にも伝わってきた……。

新たな出発を期して

ハンガリー動乱後のブダペスト。旧ソ連の影響力の強い体制下で、アントン・モルナーは、来る日も来る日もスターリンをはじめとする為政者たちの肖像画を描くことを余儀なくされていた。その限りにおいては、夫婦とふたりの娘、家族四人が食べていくには十分な収入と安定した暮らしは約束されていたのだが、自由へのあこがれ、そして創作への欲求と現実との葛藤は押し止めようもなかった。

ある日は、妻に思い切ってこう切り出した。「ハンガリーを出よう。フランスへ行こう」。突然の話にクリステイーナは驚いたが、アントンの目が真剣であることとを察すると、彼女もすぐに決意したという。彼女は一途なアントンの性格をよく知っていたし、そうすることが彼の才能を花開かせるためにいざばいい選択だとも理解していたのである。一九八八年のことだった。

フランスでの生活のスタートは、しかし決して甘いものではなかった。アイスクリームを小さな娘に買ってやることもできなかった……と、彼は当時を振り返る。だが天性の彼の才能は、自由の地と、自由な時間を得たことで確実に熟成していった。徐々に絵が売れ始め、このディジョンの自宅兼アトリエを手に入れた頃には、彼の名はパリで知る人ぞ知る存在になっていた。

そして現在までにフランスはもちろん、ドイツ、ルクセンブルク、イギリス、アメリカ、シンガポールと、世界各地で個展を成功させており、今年十一月には、



アントンのディジョンの自宅にて。彼自身がディスプレイしてくれた絵画の数々。